

1987-11

No. 230

【表紙】

平文烏瓜文箱
大場松魚
昭和56年制作

・解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

特集：文化財をめぐる国際協力

随想			
文化財保存修復今昔	濱田 隆	4	
メトロポリタン美術館の日本室	鈴木嘉吉	8	
最近の海外展の動向について	山本信吉	10	
日韓における埋蔵文化財保存科学の協力	沢田正昭	14	
ユネスコを中心とする世界の文化財保存の現状	野口英雄	16	

都道府県のページ

我が県の文化行政◎			
「しずおか文化の祭典」について	静岡県	19	
特色ある博物館・美術館紹介④			
住人設定のある「生活情景」展示	江東区深川江戸資料館	22	
都道府県月間行事予定	11月	24	

文化庁だより

報告			
昭和62年度文化振興会議			
・東部地区文化振興会議		25	
・中部地区文化振興会議		26	
・西部地区文化振興会議		27	
展覧会紹介			
難波田 龍起展		29	
・文化庁行事報告及び予定		30	
・国立劇場ニュース		31	

日本の美術

No.259

岩佐又兵衛

辻 惟雄

定価一、三〇〇円

監修—文化庁
東京国立博物館
京都国立博物館
奈良国立博物館

戦国の世に生まれ信長の虐殺からのがれた男児は、やがて奇想の画人として活躍した。歴史や物語などを題材にした絵巻物にみられる荒々しく残忍な場面は、又兵衛とその時代の一面を物語る。福井に生まれ育った異色絵師の活躍ぶりを、近年発見され一躍話題となった絵巻物を中心にその謎のヴェールを解き明かす。

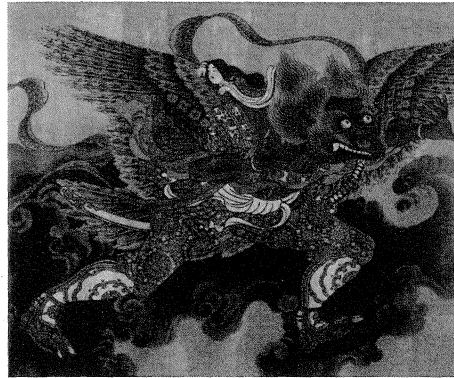
◆付録◆ 遍歴と伝説—浮世又兵衛と浮世坊

東京国立文化財研究所 鈴木廣之

■目次 陰翳の画家岩佐又兵衛 又兵衛の伝記 又兵衛の落款ある作品—勝以画 又兵衛風絵巻群 山中常盤/堀江物語/堀江巻双紙/上瑠璃/小栗判官/絵巻群の共通点/その他の古浄瑠璃絵巻群/又兵衛工房の存在 時棟風俗画 忠直/勝子、そして又兵衛

江戸絵画シリーズ

伊藤 若冲 (発売中)	谷 文晁 (発売中)	曾我 白蝶 (発売中)	岩佐 又兵衛 (発売中)	英 一 蝶 (発売中)	冷泉為恭と復古大和絵 (発売中)	江戸の狩野派 (発売中)
-------------	------------	-------------	--------------	-------------	------------------	--------------



小栗判官絵巻「竜王出現の場面」

◆既刊のご案内 定価1,300円 ★印は1,140円 <刊行目録表>

飛鳥・奈良絵画	百橋明穂	平 倉 隆	有賀祥隆	鎌 倉 隆	濱田 弘	室 町 隆	武田恒夫	桃 山 隆	佐々木丞平	江戸絵画I(前期)	小林 忠	江戸絵画II(後期)	小林 忠	肉筆浮世絵III(北条)	榑崎宗重編	肉筆浮世絵II(明和)	榑崎宗重編	肉筆浮世絵I(寛政)	榑崎宗重編	服 染 飾	日野西資孝	友 禪	山辺知行	金 禪	北村哲郎	印 籠	荒川浩和編	螺 鈿	河田 貞編	漆 工	小松大秀編	漆 工(中世編)	鈴木規夫編	漆 工(近世編)	灰野昭郎編	頰川・木米・道八 (陶磁)	河原正彦編	伊 里	藤岡了一編	茶 道	藤岡了一編	時代別陶磁シリーズ	巽 淳一郎	陶磁(近世編)	河原正彦	陶磁(中世編)	矢部良明	陶磁(原始・古編)	巽 淳一郎
---------	------	-------	------	-------	------	-------	------	-------	-------	-----------	------	------------	------	--------------	-------	-------------	-------	------------	-------	-------	-------	-----	------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	----------	-------	----------	-------	---------------	-------	-----	-------	-----	-------	-----------	-------	---------	------	---------	------	-----------	-------

〒160 新宿区西早稲田2-11-13

至 文 堂

☎ 03 (208) 2251 (営業)

最近の海外展の動向について

文化庁文化財保護部
美術工芸課長

山本信吉



去る九月十七日、ドイツ連邦共和国(西独)のハンブルグ特別市立工芸美術博物館で、文化庁・国際交流基金共催による「四季、日本の美術」展が開会された。その前日、同館で行われた開会式にはアクセル・フォン・ザルデルン館長、杉浦駐ハンブルグ日本総領事、大崎文化庁長官(山本代読)、小塩国際交流基金ケルン日本文化会館長のそれぞれの挨拶があり、参会者は同館のロビー、階段を埋め尽くして極めて盛会であった。この展覧会は花鳥、草虫など日本の四季の変化の美しさを題材とした絵画、工芸品など桃山、江戸時代の美術品百件(うち重文二件)で構成されたもので、文化庁主催(文化財保護委員会時代を含む)になる日本古美術の海外展としては第二十五回目に当たる。日本の秋の気候とほぼ変りないハンブルグの地で、適切に温湿度調整された展示室に、随伴した美術工芸課鈴木

規夫、中村順昭両君の手によって並べられた文化財が全点ケース内に収められた格調のある展示風景を眺めつつ、かつて海外展開催に尽力された美術工芸課諸先輩の苦勞話を憶い出して隔世の感に堪えなかった。

戦後の日本古美術品の海外展の歴史は昭和二十六年九、十月に開催された「講和記念サンフランシスコ日本古美術展」会場、デ・ヤング記念博物館)に始まる。この展覧会は文化庁の前身である文化財保護委員会とデ・ヤング記念博物館との共催で行われたもので、出品件数は百七十八件、御物の「絵師草紙」を始めとして雪舟の「四季山水図」など重要文化財四十八件を含む絵画、彫刻、工芸、書跡、考古の名品展で、規模としては戦前唯一の海外展である昭和十四年の「ベルリン日本古美術展(百二十六件、うち旧国宝二十九件)」を上回るものであった。昭和二十六年七月に閣議決定をみた同展は文化財保護委員会委員長高橋誠一郎氏を団長として派遣職員七名が



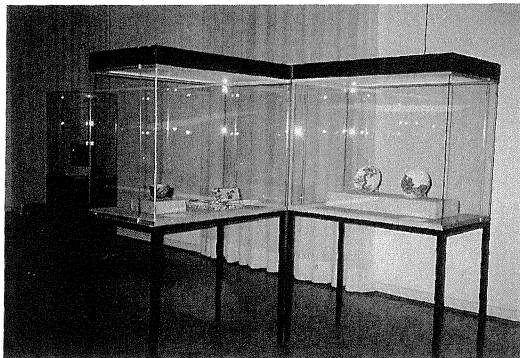
ハンブルグ特別市立工芸美術博物館



ハンブルグ特別市立工芸美術博物館
「四季、日本の美術」展標示板

ストーン美術館の五か所で、「アメリカ巡回日本古美術展」が一月から十二月の一年行われた。同展は閣議決定を経て名誉総裁に高松宮殿下、顧問に吉田首相、外務、大蔵、文部各大臣を戴いて文化財保護委員会が実施した。出品文化財は計九十一件(うち御物一件、国宝十二件、重要文化財五十七件)で米国海軍の輸送船で運ばれた。全期間の入場者数は四十二万三千人という、これ又盛況であった。この予想以上の成果は欧州諸国にも多大な反響を呼び、その強い要望に応じて実施されたのが昭和三十三年四月から翌三十四年二月にかけて行われた「欧州巡回日本古美術展」である。この展覧会も閣議決定を経て、フランス(国立近代美術館)、イギリス(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館)、オランダ(ヘーグ市立美術館)、イタリア(パラッツォ・ディ・エスポジチオーネ)の四か所で行われた。高松宮・同妃両殿下を名誉総裁に、岸首相、外務、大蔵、文部各大臣を名誉委員に戴

いた同展は神田喜一郎京都国立博物館長(途中、田中一松東京国立文化財研究所長と交替)を団長とし、出品文化財は絵画、彫刻、考古の計百四十三件(うち御物五件、国宝三十五件、重要文化財八十五件)で、鳥獣戯画、山越阿弥陀、一遍上人絵伝等の名品を含めた大展覧会であった。このように戦後初期の海外展はいわば日本の国を挙げての事業であったが、その後しばらく海外展のことはなく、昭和四十年代には四十年の「米加巡回日本古美術展」、四十二年には復帰前の琉球政府下での「沖縄日本古美術展」など六件の海外展が行われた。ついで



ハンブルグ特別市立工芸美術博物館
「四季、日本の美術」展 会場風景

五十年代に入ると海外展は毎年のように開催されるようになり、アメリカ九回、西ドイツ二回、フランス一回の計十二回、昭和六十年代では今日までの三か年間にアメリカ二回、スウェーデン一回、西ドイツ一回の計四回が行われていた。

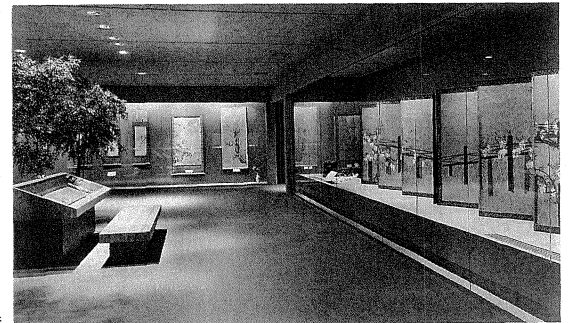
昭和四十年代後半以降にみられる文化庁主催海外展の特徴は、初期の時代と異なり、東洋部門あるいは日本部門のある欧米の主要美術館と文化庁との協議が中心を占めるようになったことである。展覧会の内容も例えば「禅林美術展」(昭和四十五年、米國ボストン美術館)、「日本文人画展」(昭和四十七年、米國アジアハウスギャラリー)、「日本名陶百選展」(昭和四十七、八年、米國シアトル美術館)などのように日本文化の様々な分野を専門の立場から取上げて行く方向が次第に顕著となっている。

こうした傾向は海外展が一見アメリカ中心に行われているかのような印象をもたらした。文化庁主催海外展は先にも述べたように二十五回行われ、そのうち戦後の日米関係を反映してアメリカ展は十七回あるが、昭和四十年代後半から五十年代の海外展十五回のうち十二回がアメリカで行われたのはその傾向をよく示している。時にはこれについてアメリカ偏重に過ぎるといった批判もあるが、実際の理由には日本美術に関する関心、研究がアメリカの美術館に高く、また日本美術の研究者の数も多いことにある。去る昭和五十二年、日米



昭和26年サンフランシスコ日本古美術展 会場風景

教育文化交流会議(CULCON)の分科会である博物館小委員会において、日米の日本古美術品に関する美術館関係者が集まり、日本古美術品の取扱い、展示環境等を定めた、「海外展の際の美術品の取扱いに関するスタディー・グループ」報告書を作成した。この報告書は爾来アメリカで日本古美術展を行う場合に遵守すべき基本事項と評価されているが、その大部分がせいぜい弱な材質で構成されている日本の文化財の特質を考えると、こうした両国間の専門家の努力がアメリカで円滑に海外展を



デトロイト美術館「雪舟と室町水墨画」展 会場風景

行い易い背景となっていることは特に留意すべき点であろう。

我が国と友好関係の実績を持つアメリカの主要美術館よりの海外展開の申入れは今後共永続する状況にあるが、近年の特徴は欧州諸国よりの要望が急速に高まっていることである。この数年、文化庁と国際交流基金との共催展が増えているのはその影響の表れで、スウェーデンでの「日本陶磁名品展」(昭和六十年)及び本年のハンブルグ特別市での「四季日本の美術展」はその具体例である。海外における日本古美術展の準備は三、四

年次順)等があり、このうち出光美術館は北欧(昭和四十九年)、フランス(昭和五十六年)、アメリカ(昭和五十六、五十七年)、オーストラリア(昭和五十七年)、トルコ(昭和六十一年)と各地で開催しているのが注目されよう。

また近年の新しい傾向として市等の地方共同体の行う海外展がある。これは各都市が友好姉妹関係にある外国都市と文化交流を進めている中で、例えば福岡市とフランス・ポルドー市間で行われた「江戸の美術展」(昭和五十七年)、名古屋市がメキシコ市、ロサンゼルス市で開いた「日本の侍の世界展」(昭和五十九年)等がある。自身で海外展を行うに足りる所蔵品を持っている博物館、美術館は現状ではその数が限られているが、そのうち国並みに地域の社寺、個人の所有する文化財を借りて海外展を行う時が来る可能性もあるかもしれない。

このほか、特定の社寺に関する海外展としては「唐招提寺展」(昭和五十二年)、「国宝鑑真和上像中国展」(昭和五十五年)、「法隆寺宝物展」(昭和五十六年)、「東大寺秘宝展」(昭和六十一年)があり、それぞれ仏縁を得て開催されて時の話題となっている。

◇
こうした所謂民間レベルでの海外展について、文化庁はこれまで主催者の要望をうけて指導、助言に当たり、出品文化財の内容によつては文化庁の担当者、時には国立博物館の

協力を得て学芸担当者を派遣するなど、展覧会の円滑な運営と出品される文化財の万全に努めているが、これ又、その将来については課題が多いと思われる。

時折、地下鉄等の広告ポスターを見て感じることであるが、現在の日本ほど諸外国の美術展を見るのに恵まれた国はないと思われる。真の名品がどれ位来ているのかは別として、そのうち世界中の美術館で日本に所蔵品を出品したくないかと思われ、こうした現象はひとえに報道機関の文化担当者の努力によるもので、その功績は極めて大きい。しかしながら国際文化交流は文字通り相互交流である。最近、日本に所蔵品を出品した欧州の某美術館長から日本古美術展を要望された。その館長の言いは日本の公私立の美術館にこれ迄多くの館蔵品を貸出している、是非考慮して欲しいとのことであったが、私はかつて或る新聞社の文化担当者が「我々は日本のために苦勞して外国美術展を招致している、若し出品国がお返しに日本古美術展を求めたら、それに答えるのは国の責任」と言っていたのを憶い出した。近年、日本古美術展を行うためには文化庁の動向が無視出来ない。気付き始めた欧州諸国は、外交ルートを通じ、時には直接に熱い目差しを送り始めているが「検討しておきます」と言う返事を「イエス」と受取って帰る欧米の人々に「駄目」と返事するのは勇気を要する。

年かかるのが通例で、文化庁が原則として一年の海外展開能力を限度としている現状の中で、欧米諸国から寄せられる期待に対し、いかに円滑に対応してゆくかと言うことは大きな課題であると思われる。

◇
日本古美術展を通じての国際文化交流は、文化庁主催展だけではなく、所謂民間レベルにおいても長い歴史と実績があることは言うまでもない。国指定の国宝、重要文化財、あるいは重要美術品を含む展覧会について見れば、昭和二十七年米國ロサンゼルス州立美術館における「中国古陶磁展」を始めとして今日まで凡そ七十五回の展覧会が行われてきている。そのうち中心を占めるのは新聞社、テレビ局等の報道機関の主催展で、その内容は多彩であるが、地域的には日本経済新聞社が昭和四十年代にソビエト連邦を始めとする東欧諸国で海外展を開催しているのが注目される。また国際交流基金(前身は国際文化振興会)の活躍が進展してくるのは昭和五十年代に入つてで、西ドイツ、ベルギー等での日本木彫展(昭和五十四年)、イギリスでの「江戸大美術展」(昭和五十六年)は欧州における近年の大規模な日本古美術展として記憶に新しい。所蔵のコレクションで海外展を行った財団法人の美術館としては常盤山文庫、出光美術館、平木浮世絵美術財団、五島美術館、MOA美術館、サントリ―美術館、徳川黎明会(開催

美術展の国際交流は博物館、美術館の相互交流の一環として行われるのが本来の姿とは思ふが、館蔵品の少ない我が国の博物館の実情を考えるとそれも現実性に乏しい。一方に今後一層進展するであろう国際文化交流の必要性を考え、他方、異なった気候、環境の変化に特に弱い我が国の貴重な文化財の保護の在り方の重みを思うと計画性のある中期的見通しを立てて行くことが必要であろう。ことに展覧会は回を重ねる度に名品展指向となる傾向があるのだから。

かつて昭和三十三年に実施した欧州巡回日本古美術展にさいし、当時の担当者が報告書の中で、
「日本の古美術品は非常にいたみ易く、長途の輸送やたびたびの展覧に對してかなり危険があるものが多く、しかもそれらの多くが個人や社寺の貴重な財産でもあるので、所有者の都合もあり、第一級の優品のみを揃えることはなかなか困難である上、最近において、かけがえのない国宝その他の重要な文化財を国外に搬出することについては国内の世論がきびしくなっている一方、昭和二十九年に、重要で破損のおそれの多いものについては、保存上、国内においても移動を制限し、出品を許さないという規定が設けられていることもあって(以下略)」と述べて、海外展実施の難しさにふれている言葉は今日なお日本古美術の海外展の課題として重みを持っている。

文化庁行事報告及び予定

9月文化庁行事報告

- 3日 昭和62年度文化財建造物修理主任技術者講習会（於：国立教育会館）10日まで
- 8日 文化振興会議（中部地区）（於：奈良県）9日まで
- 8日 文化振興会議（西部地区）（於：鹿児島県）11日まで
- 10日 西日本地区国語問題研究協議会（於：松山市）11日まで
- 16日 都道府県宗教学法人事務担当職員研修会（於：国立教育会館）17日まで
- 17日 東日本地区国語問題研究協議会（於：弘前市）18日まで
- 18日 文化財保護審議会
- 24日 文化振興会議（東部地区）（於：千葉県）25日まで
- 24日 芸術祭（国際公演）（東京公演）（於：国立劇場）26日まで
- 29日 芸術祭（国際公演）（奈良公演）（於：奈良市）

11月文化庁行事予定

- 上旬 地域文化功労者表彰式
- 5日 文化財愛護全国研究会（於：東京国立博物館）6日まで
- 6日 国立美術館所蔵内外美術名品展「浜口陽三展」（於：日立市）22日まで
- 10日 関東甲信越地区著作権講習会（於：国立オリンピック記念青少年総合センター）11日まで
- 12日 中国・四国地区宗教学法実務研修会（於：徳島市）
- 13日 文化財保護審議会
- 28日 国立美術館所蔵内外美術名品展「浜口陽三展」（於：いわき市）12月20日まで
- 30日 指定文化財展示取扱講習会（於：京都市）12月5日まで
- 下旬 第17期国語審議会第4回総会

国立劇場ニュース

十一月歌舞伎公演

曲亭馬琴原作 三島由紀夫作・演出
通し狂言 椿説弓張月 三幕
11月5日（木）〜27日（金）
昭和四十四年十一月、開場三周年記念公演として上演された『椿説弓張月』は、曲亭馬琴の長篇説本を原作にして三島由紀夫氏が台本化し、自ら演出までも手がけた歌舞伎劇の超大作である。歌舞伎独特の作劇術と様式的な時代物歌舞伎の演技を基調に、全てがまこと歌舞伎らしい作品に仕立て上げられている。

△上の巻▽鳥羽上皇と崇徳新院が争った保元の乱に新院側に立って敗れた源為朝は伊豆大島に流される。代官の娘能江を妻として再挙を企てるが、悪代官が平家勢を引き連れて来襲する。能江は自害して果て、為朝は忠臣の紀平治と共に拾小舟に乗って讃岐に渡る（伊豆大島の場）。

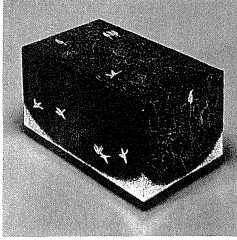
△中の巻▽為朝は新院の陵を押し、父為義と共に出現した新院の御旨によって九州に渡る（白峯の場。肥後の国木原山中で再挙の為の兵を集める妻の白縫姫と一子舜天丸に再会する（木原山中・同山塞の場）挙兵の時至り海路東上しようとするが暴風に遭う。白縫姫は波と風を鎮めんと海中に身を投じ蝶に変化して船を救う。郎党高間太郎は死ぬが、紀平治と舜天丸は怪魚に助けられる。船と怪魚の流れ着く先は、いずこか（薩南海上の場）。



△下の巻▽為朝らは琉球に漂着した。時しも琉球は内乱の真只中。奸臣利勇は巫女阿公と組んで寧王女が後嗣となるのを妨げていた。漂着した為朝は舜天丸や紀平治と再会し、寧王女に乗り移った亡妻白縫姫と再会（北谷斎場の場）。為朝は王女を救って琉球王朝の再建に力を尽す。悪逆非道の阿公を討つたが、実はこの阿公こそ紀平治の四十年前以前の妻だったし、為朝と共に琉球王朝再建に尽力する鶴と亀兄弟の祖母でもあった（夫婦宿の場）。ようよう琉球は平定された（夫婦宿の場）。という人々の願いを固辞して舜天丸を国

王に推し、新院の迎えである白馬にまたがり、日本をむきして為朝は帰途につくのであった（運天海浜宵宮の場）。以上、各場面に三島氏らしい見せ場が用意されている。大島の場は純粹な義太夫歌舞伎で壮重な竹本劇だが△中の巻▽からは一転してグロテスクな女たちによる鬨り殺しや大船の難破、怪魚や鳥天狗の活躍、そして血潮飛び切腹場面と、息もつかせぬ見せ場が続く△下の巻▽で又々一変、エキゾチックな琉球を舞台にスケールの大きい王朝再興の物語が繰りひろげられる。三島

紙解説



平文鳥瓜文箱
昭和56年制作
大場 松尾 (大正5年~)
高さ 14.6cm
15.8×26.4cm

平文とは金や銀の板金を文様に切り、漆器の塗面に貼る技法で、蒔絵の技法に入れられる。中国では平脱とよばれて、唐時代に盛んに行われた。我が国には奈良時代に伝わり、平文という日本名が生まれたといわれる。はじめは草花や鳥獣の文様を平文のみで表わしていたが、次第に金粉を蒔く技法を中心とした蒔絵の一部となった。従って、平文は細かな四角の板金を貼るなど、単純なものになっていった。大場松尾は金箔の塗師の家に生まれ、はじめ家業を学んでいたが、のちに松田権六に師事し、本格的に蒔絵を学ぶとともに、中尊寺金色堂などの文化財の保存修理に従事した。また伊勢神宮の御神宝を制作する仕事で、平文の技術に出会った。金粉を蒔いた蒔絵だけでは物足りなさを感じていたため、平文の強い効果に心をうばわれ、以後、平文技法を深めることがライフワークとなった。

氏の平文技法は次第に緻密になり、あらゆることが表現できるようになった。例えば、線描を平文で表わす際には、筆の打ち込みや肥瘠まで微妙に示し、一見、粉蒔きの線かと間違えるほどである。これらの平文の成果が認められて、昭和五十七年には重要無形文化財「蒔絵」の保持者に認定された。近年、円熟期をむかえるに従い、本作品のように平文（鳥や葉・実・枝の輪郭線など）に塗り塗（実の赤や葉の緑など）など各種の技法を併用し、色彩感にあふれた華麗な作風となった。（文化庁伝統文化課主任文化財調査官 柳橋 真）

編集後記

今月は、文化財の様々な国際協力を特集しました。国内ではあまり広報されなかったのなない地味な活動もご紹介しました。これら諸活動は着実な成果を生んでおり、関係国から高く評価されています。今回の特集では文化庁が行っているすべての活動を取り上げることができず、また、国際協力の必要性がとらえられてきた今日、このような協力がより発展することを期待しています。

「報告のコナナー」では、九月に開催されました本地区の文化振興会議の概要を取り上げました。開催にご尽力くださいました千葉県、奈良県、鹿児島、各教育委員会関係者の方々に御礼申し上げます。(K)

広告の問合せ・申込み先
株式会社 きょうせい 営業課
TEL(03)2681-2141(代表)

「文化庁月報」十一月号
昭和62年11月25日印刷・発行
(通巻第二〇〇号)

編集文化庁
千原東郷千代田区蔵が岡3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい
本社千原東郷千代田区蔵が岡1丁目4番12号
営業所千原東郷千代田区西新町52番地
電話(03)2681-2141(代表)
振替口座 東京 91-16番
印刷所 ㈱行政学会印刷所

年間購読料 一八〇円(送料四五百円)
定価 二、一六〇円(送料共)